日本経済新聞　2016年(平成28年)12月2日(金曜日)

交遊抄

経営者の兄貴分

石見陽

十数年前、起業を目指し途半端に経営に携わるな金融機関の紹介で訪れたオフィスの入り口に自身の等身大の看板を置き、金髪にアロハシャツ姿で現れたのが、保険仲介を手掛けるエージェント（東京・港）代表の一戸敏さんだった。

派手な見た目に反して自制心が強く、「飲み会は22時半に切り上げる」など一度決めたことは貫き通す。面倒見もよく、当時珍しかった医師の起業家である私を応援し、経営者が集まる飲み会に何度も誘ってくれた。

起業して2年がたち、2人で飲んでいた時のこと。会社経営といいながらアイデアを出しに週に数回出社する程度だった私に対し、一戸さんは「中ら医師に専念した方がいい」と諭してくれた。そあるオフィスの言葉が、会社経営に本気で打ち込み新規株式公開（IPO）を目指すきっかけになった。

2010年の冬は経営者として一番つらい時期だった。赤字続きで社員が次々と辞め、経営陣の意見もまとまらない。居酒屋で2人で飲みながら、彼の前で泣いてしまった。「経営者が経験するフルコースだ。後はお金の流用にだけ気をつけておけよ」。笑いながら励ましてくれた。

クールに見られがちな自分とは真逆の存在だ。経営者の兄貴分として、今後も生き方を学びたい。（いわみ・よう＝メドピア社長）